



日本文学全集
19

佐藤春夫

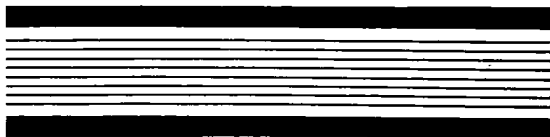


田園の憂鬱・都会の憂鬱・佗しすぎる
のん・しゃらん記録・晶子曼陀羅・他

河出書房



佐藤春夫



カラー版日本文学全集 19

1970©

昭和四十五年五月二十日 初版印刷
昭和四十五年五月三十日 初版発行

定価 七五〇円

著者 佐藤春夫

発行者 中島隆之

印刷者 草刈龍平

装幀者 亀倉雄策

本文印刷 中央精版印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クローズ 日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話・東京(292)三七二一(大代表) 振替・東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

佐藤 春夫

田園の憂鬱	五
お絹とその兄弟	五四
都会の憂鬱	六九
侘しすぎる	一三四
F・O・U	一五七
のん・しゃらん記録	一七四
女人焚死	一九
晶子曼陀羅	二〇九

殉情詩集……………三六

我が一九二二年……………三六

注 釈……………三三

年 譜……………三九

解 説……………三五

卷頭写真……………

色刷挿画……………

田園の憂鬱……………

F・O・U……………

のんしゃら……………

晶子曼陀羅……………

紅野敏郎……………三三

牛山百合子……………三九

中村眞一郎……………三五

榊原和夫……………

山本丘人……………

中村直人……………

森田曠平……………

佐藤春夫

田園の憂鬱

或いは病める薔薇きょうび

I dwell alone
In a world of moan,
And my soul was a stagnant tide.

Edgar Allan Poe

私は、呻吟の世界で
ひとりで住んでいた。
私の霊は澱み腐れた潮であった。

エドガア アラン ポオ

その家が、今、彼の目の前へ現われて来た。

初めのうちは、大変な元気で砂ぼこりを上げながら、主人の後に
り前になりして、飛びまわり纏わりついていた彼の二疋の犬が、よう
よう柔順になって、彼のうしろに、二疋並んで、そろそろ随いて来る
ようになったところである。高い木立の下を、路がぐっと大きく曲った
時に、

「ああや々と来ましたよ」

と言いながら、彼らの案内者である襟毛の太っちょの女が、片手で
日にやけた額から滴り落ちる汗を、汚れた手拭で拭いながら、別の片

手では、彼らの行く手の方を指し示した。男のように太いその指の尖
を伝うて、彼らの瞳の落ちたところには、黒っぽい深緑のなかに埋も
れて、目眩しいそわそわした夏の朝の光のなかで、鈍色にどっしりと
ある落着きをもって光っているささやかな萱葺の屋根があった。

それが彼のこの家を見た最初の機会であった。彼と彼の妻とは、そ
の時、おのおのこの草屋根の上にさまざまよういていた彼らの瞳を、互いに
相手のその上に向けて、瞳と瞳とで会話をした——
「いい家のような予覚がある」

「ええ私もそう思うの」
その草屋根を見つめながら歩いた。この家ならば、いつか遠い以前
にでも、夢にであるか、幻にであるか、それとも疾走する汽車の窓か
らでもであったか、何かで一度見たことがあるようにも彼は思った。
その草屋根を焦点としての視野は、実際、どこでも見出されそう
な、平凡な田舎の横顔であった。しかも、それがかえって今の彼の心
をひきつけた。今の彼の憧れがそんなところにあったからである。そ
うして、彼がこの地方を自分の住家に択んだのも、またこの理由から
にはかならなかつた。

広い武蔵野がすでにその南端になって尽きるところ、それがようや
くに山国の地勢に入ろうとする変化——言わば山国からの微かな余情
を湛えたエビロオグであり、やがて大きな野原への波打つプロオグ
でもであるこれらの小さな丘は、目のとどくかぎり、ここにもそこにも
も起伏して、それが形造るつまらぬ風景の間を縫うて、一筋の平坦な
街道が東から西へ、また別の街道が北から南へ通じているあたりに、
その道に沿うて一つの草深い農村があり、幾つかの卑下った草屋根が
あった。それはTとYとHとの大きな都市をすぐ六七里の隣にして、
響えば三つの劇しい旋風の境目に出来た真空のように、世紀からは置
きっ放しにされ、世界からは忘れられ、文明からは押し流されて、し
よんぼりと置かれていたのであった。

一たい、彼が最初にこんな路の上で、限りなく楽しみ、また珍らし

く心のくつろいだ自分自身を見出したのは、その同じ年の暮春のある一日であった。こんな場所にこれほどの片田舎があることを知って、彼はまず驚かされた。しかもその平靜な四辺の風物は彼に珍らしかった。ずっと南方のある半島の突端に生れた彼は、荒い海と峻しい山とが激しく咬み合せて、その間で人間が微小にしかし賢明に生きている一小市街の傍を、大きな急流の川が、その上に筏を長々と浮べさせて押し合いながら荒々しい海の方へひしめき合せて流れてゆく彼の故郷のクライマックスの多い戯曲的な風景にくらべて、この丘つづぎ、空と、雑木原と、田と、畑と、雲雀との村は、実に小さな散文詩であった。前者の自然は彼の峻厳な父であるとすれば、後者のそれは子に甘い彼の母であった。「帰れる放蕩息子」に自分自身をたとえた彼は、息苦しい都会の真中であって、柔かに優しいそれゆえに平凡な自然のなかへ、溶け込んでしまいたいという切願を、かなり久しい以前から持つようになっていた。おお！そこにはクラシックのような平靜な幸福と喜びとが、人を待っているに違いない。Vanity of vanity, vanity, all is vanity! 「空の空、空の空なる哉都て空なり」あるいはそうでないにしても……。いや、理屈は何もなかった。ただ都会のただ中では息が屏った。人間の重さで押しつぶされるのを感じた。そこに置かれるには彼はあまりに鋭敏な機械だ、そこが彼をいやが上にも鋭敏にする。そればかりではない、周囲の騒がしい春が彼を一層孤独にした。「ああ、こんな晩には、どこでもいい、しつとりとした草葺の田舎家のなかで、暗い赤いランプの陰で、手も足も思う存分に延ばして、前後も忘れる深い眠りに陥入って見たい」という心持が、華やかな白熱燈の下を、石甃の路の上を、疲れきった流浪人のような足どりで歩いている彼の心のなかへ、切なく込み上げて来るものが、まことにしばしであった。「おお！深い眠り、おれはそれを知らなくなつてからもう何年になるであろう？深い眠り！それは言わば宗教的な法悦だ。おれの今最も欲しいのはそれだ。熟睡の法悦だ。すなわち肉体がほんとうに生きている人の法悦だ。おれはまずそれを求

める。それのあるところへ行こう。さあ早く行こう！」彼は自分自身の心のなかでそう呟いた。あるいは、口に出してさえ呟いた。そうして矢も楯もたまらない、郷愁に似たような名づけようのない心が、そのどことも知れない場所へ、自分自身を連れて行けとせがむのであった……。 (彼は老人のような理智と青年らしい感情と、それに子供ほどの意志とをもった青年であった)

その家が、今、彼の目の前に現われて来たのである。

道の右手には、道に沿うて一条の小渠があった。道が大きく曲れば、渠もそれについて大きく曲つた。そのなかを水は流れて行き流れて来るのであった。雑木山の裾や、柿の樹の傍や既の横手や、藪の下や、桐畑や片隅にぽっかり大きな百合や葵を咲かせた農家の庭の前などを通して、幅六尺ほどのこの渠は、事実は田へ水を引くための灌漑であつたけれども、遠い山間から来た川上の水をまっすぐに引いたものだけに、その美しさは「溪」と言いたいような気がする。青葉を透して降りそそぐ日の光が、それを一層にそう思わせた。へどろの緒土を洒して、洒し尽して何の濁りも立てずに、浅く走つて行く水は、時々ものに堰かれて、ぎらりぎらりと柄になく閃いたり、そうかと思つと縮緬の皺のように繊細に、あるいはある小さなびくびくする摩訶の発作のように光つたりするのであった。あるいは、その小さな輝きが魚の鱗のように重なり合っているところもあった。涼しい風が低く吹いて水の面を滑る時には、そこは細長い瞬間的な銀箔であつた。薄だの、もう夙くにあの情人にものを訴えるようなセンチメンタルな白い小さい花を失つた野苺のいかたまりの藪だの、そのほか、名もないかしそれそれの花や実を持つ草や灌木が、渠の両側から茂り合いかぶさりかかると、水はそれらの草のトンネルをくぐつた。そうしてその影を黒く涼しく浮べては、ゆらゆらと流れ去つた。ある時には、水はゆつたりと流れ淀んで、それは旅人が自分の来た方をふりかえつて佇むのに似ていた。そんな時には土耳古玉のような夏の午前空を、土耳古玉色に——あるいは側面から透して見た玻璃板の色に、映して

いるのであった。快活な蜻蛉は流れと微風とに逆行して、水の面とすれすれに身軽く滑走し、時々その尾を水にひたして卵をそこに産みつけていた。その蜻蛉は微風に乘って、しばらくの間は彼らと同じ方向へ彼らと同じほどの速さで、一行を迫りように従うていたが、何かの拍子について空さまに高く舞い上った。彼は水を見、また空を見た。その蜻蛉を呼びかけて祝福したいような子供らしい気軽さが、自分の心に湧き出るのであることを彼は知った。そうしてこの楽しい流れが、あの家の前を流れているであろうことを想うのが、彼にはうれしかった。

劇しい暑さは苦しい、楽しい、と表現しようとして木の葉の一枚一枚が宝玉の一断面のように輝くと、それらの下から蟬は焼かされているように呻いた。灼けた太陽は、空の真中近く昇って来ている。しかし、彼の妻は、暑さをさほどには感じなかつた。しかし、彼の妻から暑さを防いだものは、その頭の上の紫陽花の色に紫陽花の刺繍のあるパラルール——貧しい婦の天蓋——ではなかつた。それは彼の女の物思ひであつた。彼の女は今歩きながら考え耽っている、暑さを身に感ずる閑もないほど。彼の女は考えた——そうすれば今間借りをしている寺のあの西日のくわつと射し込む一室から涼しいところへ脱れられる。それよりもあの下卑た俗悪な欲張りの口うるさい梵妻の近くから脱れられる。そうして、静かに、涼しく、二人は二人して、言いたいことだけは言い、言いたくないことは一切言わずに暮らしたい。住みたい。そうすれば、風のように捕捉しがたい海のように敏感すぎるこの人の心持も気分も少しは落ち着くことであろう。あれほどの意気込みで田舎を憧れて来ながら、わずかながらもわざわざ買ってもらつた自分の畑の地面をどう利用しようなどと考へているでもなく（それはもとよりそうであるとは思つたけれども）それよりも本一行見るではなく一字書こうとするでもなく、何一つ手にはつかぬらしい。そうしてもしそんなことでも言ひ出せばきつと吐鳴りつけるにきまつている、それでなくてはさへも、もう全然駄目なものと見放されている——わけて自分との早婚すぎる無理な結婚の以後は、ことにそう思われているら

しい父母への心づかひもなく、ただうかうかと——ではないとあの人自身では言つても、とにかくうかうかと、その日その日の夢を見て暮しているのである。いつ、建てるものとも的のない家の図面の、しかも実用的というような分子などは一つもないものを何枚も何十枚も、それは細かく細かく描いているかと思つと、不意に庭へ飛び出して、犬の真似をして犬と一緒に成り、燃えている草いぎれの草原を這つたり転げまわったり、そうかと思つと突然破れるような大声で笑ひ出したり叫び出したりするこの人は、ほんとうに何か非常に寂しいのであろう。何事も自分には話してくれないから解るはずもない。何か自分には隠しているのではなからうか……。彼の女は、五六日前に読みつた藤村の「春」を思い出した。単純な彼の女の頭には、自分の夫の天分を疑うて見ることなどは知らずに、自分の夫のことをその小説のなかの一人が、自分の目の前へ——生活の隣りへ、その本のなかから抜け出して来たかのようにも思つて見た……。あれほど深い自信のあるらしい芸術上の仕事などは忘れて、放擲して、ほんとうにこの田舎で一生を朽ちさせるつもりであらうか。この人は、まあ何とこの不思議な夢を見たがるのであろう……。それにしても、この人は、他人に対しては、それは親切に、優しく調子よくしながら、なぜこうまで私には気むずかしいのであろう。もしや、あの人のある女に對する前の恋がまだ褪せきらない間に、私はあの女の胸のなかへはいって行つて、そのためにあの人はしばらくはあの女を忘れてはいたけれども、根強く残つていたあの恋がしばらくの間にか再び自分をのけもたりにしてまた芽を出したのではなからうか。そうして私には辛くあたる……。今のままで、さぞかし当人も苦しいであらうが、第一そばにゐるものがたまらない。返事が氣に入らないといつては転ぶほど突きとばされたり、打たれたり、何が氣に入らないのか二日も三日も一言も口を利こうとはしなかつたり……。あの人はきつと自分との結婚を悔いているのだ。少くとももし自分とはなく、あの女と一緒に住んでいたならばどんなに幸福だつたらうかと、時々、考えるに違ひない。

考えるばかりではない、現に、自分にむかつてそう言ったことさえある——「あの時、おれがあの子、あの純潔な素直な娘と一緒になれさせたいならば、あの子が私をよく統一して、おれは今ごろ、いろいろな意味でもっと美しいもっと善い生活が出来ていたらどうに」と……。實際あの子は、自分も知っているけれども、自分などよりはもっと美しく、もっと優しい。私はあの子があの子をどんなに深く思っているかはよく知っている……いや、いや、そうではない。あの子はやっぱあの子の自身で何か別のことを考え込んでいるのである……。そうだ、夫は、「ただ、私をそつとしておいてくれ」と言った……。

ふと、

「俺には優しい感情がないのではない。俺はただそれを言い現わすのが恥しいのだ。俺はそういう性分しやうぶんに生れついたのだ」

彼の女は、昨夜、いつになく打ち解けて彼が語った時、彼の女にむかつて言った彼の女の夫の言葉を思い出すと、その言葉を反芻しながら歩いた。そうしてまだ見たことのない家の間どりなどを考えた。たとい新婚の夢からはと、つくに覚めたころであつても、こんな暑さの下でも、ただ単に転居するというだけの動機で心持がふだんよりもずっと活き活きとして来て、こんなことを考えて悲しんだり、喜んだり、慰んだりすることの出来るのは、まだ世の中を少しも知らない幼妻の特権であつたからだ。そうしてそれがまた、あの案内の女が、喋りつづけて喋っているその家の由来について、何の興味も持たぬらしく、ただ無愛想に空返事を与えているに過ぎなかつたゆえんである。——この案内の女は、その長い暑苦しい道の始終を、ながながと喋りつづけて休まなかつた。この女は自分の興味をもっているほどのことなら、他の何人にとつても、非常に面白いのが当然だと信じている単純な人々の一人であつたから。

こんな道を、彼らは一里近くも歩いた。

そうしてその家は、もう、彼ら一同の目の前に来ていた。

家の前には、はたして渠が流れていた。一つの小さな土橋が、茂る

がままの雑草のなかに一筋細く人の歩んだあとを残して、その上を歩く人々に、あの幅一間あまりの渠を越させて、人々をその家の入口へ導く。

入口の左手には大きな柿の樹があつた。そうして奥の方にもあつた。それらの樹の自由自在にうねり曲つた太い枝は、見上げた者の目に、「私は永い間ここに立つている。もう実を結ぶことも少くなつた」とその身の上を告げているのであつた。その老いた幹には、大きな枝の脇の下に寄生木が生えていた。その樹に対して右手には、その屋敷とそれの地つづきである桐畑とを区限つて細い溝があつた。何の水でもあろう。水が涸れて細く——その細い溝の一部分をなお細く流れて男帯よりもっと細く、水はちよろちよろ喘ぎ喘ぎ通うていた。じめじめとした場所を、一面に空色の花の月草が生え茂つていた。また子供たちが「こんべとう」と呼んでいるその菓子こしの形をした灰赤く白い小さな花や、また「赤まんま」と子供たちに呼ばれている野花なども、その月草に雜つて一帯に蔓つていた。それはなつかしい幼な心をよびさます藪であつた。昼間は螢の宿であらう小草のなから、葉には白い堅の縞が鮮やかに染め出された蘆が、すらりと、十五六本もひとところに集まつて、爽やかな長いそのうえ幅広い葉を風にそよがせて、ざわざわと音をたてているのであつた。屋敷の奥の方から流れ出て来た水は、それらの小草の、茎をくぐつてそれらの蘆の短い節々を洗いきよめながら、うねりうねつて、解きほぐした絹糸の束のようにつやつやく、なやかに揺れながら流れた。そうして、か細く長々しいある草の葉を、生えたままですり倒して、その草のために一時流動することをさえぎられたそれらのささやかな水は、その草の葉を伝わりと落ち瀝いでいた。彼にはこの家の屋後に、湧き立つ小さな清新な泉がありそうにも感ぜられた——そういう地勢でもあつたから。

家の背後は山つづきで竹藪たけくさになつていた。竹のなかに素晴しく大きな丈の高い樺が、この清楚な竹藪のなかの異端者のように、重苦し

く立っていた。屋敷の庭は丈の高い——人間の背丈よりも高くなつた
 榊の生垣で取り囲まれてあつた。家全体は、指願の遠さで見た時にそ
 うであつたごとく、目の前に置かれて見ても、茂るにまかせた樹々の
 枝のなかに埋められて、茂るにまかせた草の上に置かれてあつた。

犬は一足ずつ土橋の側から下りて行つて、灌水の水をこもごもに味
 おうた。

彼はその土橋を渡るうともせず、「二径 藪荒」と口吟みたいこの
 家を、思いやり深そうにしばらく眺めた。

「ねえ、いいじゃないか、入口の気持が」

彼はこの家の周囲から閑居とか隠棲とかいふ心持に相応したある情
 趣を、幾つか拾ひ出し得てから、妻にむかつてこう言つた。

「そうね。でも随分荒れていること。家のなかへはいつて見なければ
 ……」

彼の妻は少々不安そうに、またさかしげに、気まぐれな夫をたしな
 める時にすべての妻がする口調をもつてそう答えた。しかし、すぐ思
 いかえして、

「でも、今のお寺にいることを思えば、どこだつていいわ」

今飲んだ水から急に元氣を得た二足の犬は、主人たちよりも一足さ
 きに庭のなかへ跳り込んだ。松の樹の根元の濃い樹かげを択んだ二足
 の犬どもは、わがもの顔に土の上へ長々と身を横たえた。彼らは顔を
 突き出して、下顎から喉首のところを地面にべつたりと押しつけ、兩
 方から同じ形に顔を並べ合つた。そうして全く同じような様子に体を
 曲げて、後脚を投げ出した様子は、まことに愛らしいシンメトリーで
 あつた。赤い舌を垂れて、苦しげな息を吐き出しながら、庭にはいつ
 て来た彼らの主人たちの顔を無邪気な上眼で眺めて、静かに楽しそう
 に尾を動かして見せた。いかにも落ち着いたらしいその姿は、ここが
 もう自分たちの家だということを、彼らの主人たちよりさきに十分に
 予覚しているらしいようにも、彼には見られるのであつた。もしこの
 時、妻が彼のそばにいたならば彼は妻にこう言つたらう——

「ね、フラテもレオ（二つとも犬の名）も賛成しているよ」
 けれども彼の妻は、案内の女と一緒にその縁側の永い間閉されてい
 た戸を開けようとして、鍵で鍵穴をがたがた言わせている。

樹という樹は茂りに茂つて、緑は幾重にも積み重なつた。錯雑した
 枝と枝とは網の目になり壁になり軒になつて、庭はほとんど日かげも
 さし込まなかつた。土の匂いは黒い地面から、冷々と湧いて来た。彼
 は足もとから立ちのぼるその土の匂いを、香を匂う人のように官能を
 尖らせてしみじみと味おうて見た——じゃらじゃらと涼しく音を立
 てていた鍵束の音がやまつて、縁側の戸が開けられるまで。

* * *

「やつと、家らしくなつた」

昨日、門前で洗い浄めた障子を、彼の妻は不慣れな手つきで張つた
 のである。最後の一枚を張り了つた時、それを茶の間と中の間のあい
 だの敷居へ納めようとして立っている夫の後姿を見やりながら、妻
 は満足に輝いてそう言つた。

「やつと家らしくなつた」彼の女は同じことを重ねて言つた。「晝は
 すぐかえに來るといふし……でも、私はほんとうに厭だつたわ、お
 とつち初めてこの家を見た時にはねえ。こんな家に人間が住めるかと
 思つて」

「でも、まさか狐狸の住家ではあるまい」

「でもまるで浅茅が宿よ。でなげや、こおろぎの家よ。あの時、畳の
 上一面にびよんびよん逃げまわつたこおろぎはまあどうでしょう。恐
 ろしいほどでしたわ」

「浅茅が宿か、浅茅が宿はよかつたね。……おい、以後この家を雨月
 草舎と呼ぼうじゃないか」

（彼ら二人は——妻は夫の感化を受けて、上田秋成を讚美していた）
 夫の愉快げな笑い顔を、久しぶりに見た妻はうれしかった。

「そこで、今度は井戸換えてすよ、これが大変ね。一年もまるで汲ま

ないというのですもの、水だつて大が腐りますわねえ」

「腐るとも、毎日汲み上げていなければ、俺の頭のように腐る」

この言葉に、「またか」と思った妻は、今までのほしゃいだ調子を忘れておすおす夫の顔を見上げた。しかし夫の今日の言葉はただ口のさきだけであつたと見えて、その骨ばつた顔にはもとのままの笑があつた。それほど彼は機嫌がよかつたのである。それを見て安心した妻は甘えるように言い足した。

「それに、庭を何とかして下さらなげやあ。こんな陰気なのはいや！」
疲れて壁にもたれかかつた妻の膝には、彼と彼の女との愛猫が、しなやかにしのび寄つてのっそりと上つているところであつた。

「青(猫の名)や。お前は暑苦しいねえ」

と言いながらも、妻はその猫を抱き上げているのである。彼の家庭には犬がいる。猫がいる。一たん愛するとなると、程度を忘れて溺愛せずにはいられない彼の性質が、やがて彼らの家庭の習慣になつて、彼も彼の妻も人に物言うように、犬と猫とに言いかけるのが常であつた……。

彼ら夫婦がこの家に住むようになった日から、遡さかのぼつて数年の前であつた。

この村で一番といわれている豪家N家の老主人は、年をとつて、ひどく人生の寂寞さびしを感じ出した。普通人にとつてこういう時に最も必要なものは、老いと若きとを問わず異性であつた。そうして、この老人は、都会から一人の若い女を連れて来た。この豪家は、この風流人の代にその田の半分をなくしたのだけれども、さすがに老人の考えは金持らしいものであつた——ただ美しいだけで、何の能もないような女はつれて来なかつた。少しぐらひは醜みにくくとも、年さえ若ければ我慢するとして、村のためにもなり、それよりも自分の経済のためにもなるような女を扱つかんだのであつた。一口に言へば、彼は、今までは村にな

くて不自由をしていた産婆を副業にする妾を蓄えたのだ。それから自分の家の離れ座敷をとりはずして、彼の屋敷からはすぐ下に当るところへ、それを建て直した。冬には朝から夕方まで日が当るような方角を考へて、四間の長さをつづく縁があつた。玄関の三疊を抜けて、六疊の茶の間には伊を切らせた。黒柿の床柱と、座敷の欄間に嵌め込んだ麻の葉つなぎの棧いしのある障子の細かさは、村人の目をそば立たせた。さすがはうち、山から一本扱りに扱つて伐り出した柱だ、目ざわりな節一つない、と大工はその中古の柱を愛無しながら自分のもののように褒めた。そうして農家の神々しいほど広い土間のある、太い棟や梁の真黒く煤けた台所とは違って、その家には、板をしきつめた台所に、白足袋を穿はいて、ぞろぞろ衣服の裾を引き摺つた女が、そこで立ち働くようになった。老人は、その家督を四十幾つかになつた自分の長男に譲つた。さてこの老人は幸福であつた。村の人々は、自分の年の半分にも足らぬ若さの茶呑み友達を得た隠居についてかげ口を利いた。しかし、そんなことぐらひは隠居の幸福を傷つけはしなかつた。

けれども、しかしすべての平和と幸福とは、短い人生の中にあつて最も短い。それはちょうど、秋の日の障子の日向の上にと影を落す鳥かげのようである。つと来てはつと消え去る。そうして鳥かげを見た刹那に不思議なさびしさが湧く。老人のこれらの平和の日も束の間であつた。

若い妾は、ほどなく、都会から一人の若い男を誘うて来た。村の人は、この若い男を「番頭さん」「お産婆の番頭さん」と呼んだ。村の人々は産婆には、はたして「番頭さん」が入用なのかどうかを知らなかつた。そうしてこの隠居は、自分の若い妾が、自分には無断で、若い「番頭さん」を雇い入れたことについて不満であつた。非常に不満であつた。第一にこの若い男女の生活は田舎の人々の目には贅ぜい沢たくすぎた。隠居の予算と少し違ひすぎた。隠居は彼らがもつとつつましやかであり得るはずだと考え初めた。そのことを彼の妾にたびたび

言いつけた。初めは遠まわしに遠慮がちに、しかしだんだん思い切つて言うようになった。ある夜には夜中言ひ募ることがあった。「番頭さん」は多分これらの対話を壁一重に聞いただろう。あるそんな夜の後の日に——彼の女が初めて村へ来てから一年ほどの後、若い「番頭さん」を若い妾が「雇い入れ」てから半年ほどの後、ある夕方、彼ら二人の男女の姿は、突然この村から消えた。夕方に村の方から帰つて来た馬方は、山路の夕闇のなかで、くつきりと浮き上つて白い丸い頬が目についたので、よく見ると「Nさんのお産婆」だった、とその次の朝村の人々に告げた。しかし、これは多分、この男が実際にこれを見たわけではなく、彼らがいなくなつたと聞いた時に、思いついた嘘であつたかも知れない。でなければ彼は帰つて来るとすぐそのことを、珍らしげに、手柄顔に言うべきはずだからである。人はこんな時に、ちよつとこんなことを言つて見たいような一種の芸術的本能を、誰しも多少持つているものである。——それはどうでもいいとして、この話は、話題に饑えている田舎の人々を喜ばせた、当分の間。そして二十八の女には、七十に近いあの隠居よりは、二十四五の若者の方が、よく釣り合うべきはずだったというのが、村の輿論であつた。痛ましいのは、若い妾に逃げられたこの隠居が、その後、植木の道楽に没頭し出したことである。

彼は花の咲く木を庭へ集め出した。今日はあの木をこちらに植え変え、昨日は別の庭からこの木を自分の庭にうつした。そうして明日は何かよい木を捜し出さねばと、毎日毎日、土いじりに寧ろがなかつた。春には牡丹があつた。夏には朝顔があつた。秋には菊があつた。冬には水仙があつた。そうして、彼の逃げてしまった妾の代りに、二人の十と七つとの孫娘を、自分の左右に眠らせた牀のなかに、この花つくりの翁は眠りがたかつた。彼は月並みの俳諧に耽り出した。

隠居は死んだ、それからちよつと一年経つた後に。彼は、こうして集めた花の木をそれぞれの花をわずばかり楽しんでばかりであつた。そうしてその家は、彼の末の娘とともに村の小学校長のものにな

つた。村の校長はこの隠居の養子だつたからである。すると抜け目のない植木屋があつて、算術の四則には長けており、それを実の算盤に應用することに巧みではあつたけれども、美についてはいかなる種類のそれにも一向無頓着な、当主の小学校長をたぶらかして、目ぼしい庭の飾りも皆引き抜いて行つた。大木の白木蓮、玉椿、槇、海棠、黒竹、枝垂れ桜、大きな花栴檀、梅、夾竹桃、いろいろな種類の蘭の鉢。そうしてそれらの不幸な木はかくも忙しくその居所を変えなければならなかつた。土に慣れ親しむ暇もなかつた。こうしてそれらのうちのあるものは、ために枯れたかも知れない。

小学校長は、ちよつと新築の出来上つた校舎の一部へ住んだ。自分の貰つたこの家は空家にしておいた。そうしているうちにこの家を借り手があれば貸したいと考へ出した。住む人がなければ、家は荒廢するばかりである。たとい二円でも一円五十銭でも、家賃をとつて損になることはない、と校長先生の考へはごく明瞭である。ところが、田舎では大抵の人は自分自身の家を持つている。たとい軒端がくずれて、朽ち腐つた藁屋根にむつくりと青苔が生えているような破家なりとも、親から子に伝え子から孫に伝える自分の家を持つていた。どんな立派な家にして、借家をして住まねばならないような百姓は、最後の最後に自分の屋敷を抵当流れにしてしまつた最も貧しい人々に決つていた。かくて、あの隠居が愛する女のために、また自分の老後の楽しみにと建てたこの家は実に貧しい貧しい百姓の家に化してしまつたのである。隠居が茶の間の茶釜をかけた炉には、大きないぶりがちな松薪が、めちやめちやに投げ込まれて、その煙は田舎家には無駄な天井に邪魔されて、家から外へ抜けて行く路もなかつた。そうして部屋を形造つた壁、障子、天井、畳はすぐに煤びて来た。気の毒な百姓の一家は立て籠つた煙などを苦にしてはいられない。かえつてそれから来る温かさに感謝して、秋の、冬の長い夜な夜なを、繩を纏うたり、草鞋を編んだりして、夜を更かさねばならなかつた。家賃は四月目五目目ぐらいから滞り出した。畳はすり切れた。柱へはいろいろな場

合のいろいろな痕跡がいろいろの形に刻みつけられた。「せめては下肥ぐらいいはたまるだろ」と校長先生が考えたにもかかわらず、校長先生の作男が下肥を汲みに行く朝は、そこはいつものからっぽだった。何となれば家の借り手の貧しい百姓が、自分の借りている畑へそれを運んでしまった後であったから。校長先生はひどくこの借家人を悪く思い初めた。会うほどの人には誰彼となく、貧乏な百姓の狡猾を罵り、訴えた。そうして「どうせ貧乏するぐらいの奴は、義理も何も心得ぬ狡猾漢だ」という結論を与え去った。ほかの村人は、すぐ校長先生の意見に賛同の意を示した。次には、こんな男に家を貸しておくより確立されたのを感じ出した。次には、こんな男に家を貸しておくよりも、むしろ荒れるにまかせておいた方がどれほどよいか解らないと思ひ出した。なぜかというに、この男に家を貸すことは、積極的に荒廃させることである。かえって、空家として打ち捨てておくことはその消極的な方法である。そうしてこの借家人は遂に立てられた。村の人は校長先生の態度は合理的だと考えた。

これらの間——あの隠居が亡くなってから後は、その庭の草や木のことを考えるような人は、ひとりもなかった。家と庭とは荒れに荒れた。ただ一人、あの貧乏な百姓の小娘が、隠居が在世の折に植えられたままで、今は草の間に野生のようになつて、年々に葉が哀れになり、茎がくねって行く菊畑の黄菊白菊の小さな花を、秋の朝ごとに見出ししては、ちぢくれた髪のかんざしにと折りとつた……

……彼は縁側に立つて、庭をながめながら、あの案内者であつた太つちよの女が、道々語りつづけた話のうちに、彼一流の空想を難えて、ぼんやり考へるともなく考へ、思うともなくそんなことを思ひうていた。

「フラテ、フラテ」裏の縁側の方では、彼の妻の声がして、犬を呼んでいる。「おおよしよし、レオも来たのかい。おお可愛いね。何も上げるのじゃなかったのだよ。フラテや、お前はね、今のようにあんな草ばかりのところでは遊ぶのじゃありませんよ。虻がいますよ。そこら

の間のように、鼻の頭を咬まれて、喉が腫れ上つてお寺の和尚さんのようにこんな大きな顔になつて来ると、ほんとうに心配じゃないか。いいかい。フラテはもうこの間で懲りたから解つたわね。レオや、お前は氣をおつけよ。お前の方はおとなしいから大丈夫だね……」彼の妻は牧歌を歌う娘のような声と心持とで、自分の養子である二疋の犬に物言うている。そうして涼しい竹藪の風は、そこから彼の立つている方へ抜けて通りすぎた。

真夏の廢園は茂るがままであつた。

すべての樹は、土の中ふかく出来るだけ根を張つて、そこから土の力を汲み上げ、葉を彼らの体中一面に着けて、太陽の光を思う存分に吸い込んでいたのであつた。——松は松として生き、桜は桜として、槇は槇として生きた。出来るだけ多く太陽の光を浴びて、己を大きくするために、彼らは枝を突き延ばした。互いにおのおのの意志を遂げている間に、おのおのの枝は重なり合ひ、ぶつかり合ひ、縮み合ひ、ひしめき合つた。自分たちばかりが、太陽の寵遇を得るためには、他の何物をも顧慮しては行ななかつた。そうして、日光を享けることの出来なくなつた枝は日に日に細つて行つた。一本の小さな松は、杉の下で赤く枯れていた。榊の生垣は背丈が不揃ひになつて、その一列になつた頭の線が不恰好にうねっている。それは日のあたるどころだけが生い茂り丈が延びて、諸の大きな樹の下に覆われて日蔭になつた部分は、落ち込んでしまつたからであつた。また、そのある部分は葉を生かすことが出来なくなつて、あたかも城壁の覗き窓ほどの穴が、ぼつかりとあいているところもあつた。ある部分は分厚に葉が重なり合つてまるで固つて繁つているところもあつた。ある箇所は全く中断されているのである。というのは、ちょうどその生垣に沿つて植えられた大樹の松に覆ひ隠されて、そればかりか、垣根の真中から不意に生い出して来た野生の藤蔓が人間の拇指よりもっと太い蔓

になつて、生垣を突き分け、その大樹の松の幹を、あたかも虜を捕えた網のように、ぐるぐる巻きに巻きながら攀ぎ登つて、その見上げるばかりの梢の梢まで登り尽して、それでまだ満足出来ないと思える——その巻蔓は、空の方へ、身を悶えながらもの狂おしい指のようになつて、何もないものを捉えようとしてあせり立っているものであつた。その巻蔓のうちの一つは松の隣りのその松よりも一際高い桜の木へ這いつて、仲間のどれよりもはるかに高く、空に向つて延びていた。また、庭の別の一隅では、梅の新しい枝が直立して長く高く、響えは天を刺し貫こうとする梢のように突つ立っているものであつた。かつては菊畑であつた軟かい土には、根強く蔓つた雑草があつた。それほどこか竹に似た形と性質とを持った強そうな草であつた。その硬い莖と葉とは土の表面を網目に編みながら這うて、自分の領土を確実にするためにその節のあるところから一々根を下ろして、八方へ拡がって来た。試みにその一部分をとつて、根引にしようとする、その房々した無数の細い根は黒い砂まじりの土を、ちょうど人間が手でつかみ上げるほどずつ持ち上げて来る。これが彼らの生きようとする意志である。また、「夏」の万物に命ずる燃ゆるような姿である。かく繁りに茂つた枝と葉とを持った雑多な草木は、庭全体として言えば、ちょうど、狂人の鉛色な顔に垂れかかった放埒な髪の毛を見るように陰鬱であつた。それらの草木はある不可見な重量をもつて、さほど広くない庭を上から圧し、その中央にある建物を周囲から遠巻きして押し迫つて来るようにも感じられた。

しかし、凄く恐ろしい感じを彼に与えたものは、自然の持つているこの暴力的な意志ではなかつた。かえつて、この混乱のなかに絶え絶えになつて残つている人工の一縷の典雅であつた。それはある意志の幽霊である。あの抜け目のない植木屋が、この庭園からほとんどその全部を奪い去つたとは言え、今にまだ遺されてあるものなかに、確かに、故人の花つくりの翁の道楽を偲はせずにはおかないものが一つならず目につくのである。自然の力も、まだそれを全く匿し去るこ

とは出来なかつた。例えば、もとはこんもりと槲形に刈り込まれていたであろうと思える白斑入りの繻襖柏である。それは門から玄関への途中にある。それからまた座敷から厠を隠した山茶花がある。その下かげの沈丁花がある、鉢をふせたような形に造つた霧島躑躅の幾株かがある。大きな葉が暑さのために萎れ、その蔭に大輪の花が枯れ萎びている年経た紫陽花がある。それらのものは巨人が激怒に任せて投げつけたような乱雑な庭のところにあつて、白木蓮、沈丁花、玉椿、秋海棠、梅、芙蓉、古木の高野槿、山茶花、萩、蘭の鉢、大きな自然石、むくむくと盛り上つた青苔、枝垂れ桜、黒竹、常夏、花石榴の大名、それに水の近くには薔尾、その他のものが、ほどよく挨拶され、人の手で愛しまれていたその当時の夢を、北方の蛮人よりもっと乱暴な自然の蹂躪に任されて顧みる人ともない今日に、その夢をまだ見果てずにいるかと思ふのである。また仮りに、庭のこの隅にもそんなもの一株もなかつたところか、門口にかぶさりかかつた一幹の松の枝ぶりからでも、それが今日でこそいたずらに硬く太く長い針の葉をぎつしりと身に着けていながらも、かつては人の手が、懇にその枝を労わり葉を揃え、幹を撫でたものであつたことは、誰もが容易に承認するのであらう。実は、その持主である小学校長は、この次にはその松を売ろうと考えて、この松だけはこんどの借家人が植木屋を呼ぶときには、根まわりもさせ鬼葉もとらせておこうと思つていたのであつた。

故人の遺志を、偉大なそれであるからして時には残忍にも思ふる自然と運命との力が、どんな風にぐんぐん破壊し去つたかを見よ。それらの遺された木は、庭は、自然の湧刺たる野蛮な力でもなく、また人工のアティフィシャルな形式でもなかつた。かえつて、この両様の無雑作な不統一な混合であつた。そうしてそのなかに醜さというよりもむしろ故もなく凄然たるものがあつた。この家の新しい主人は、木の蔭に行んで、この庭園の夏に見入つた。さて何かに怯かされてゐるのを感じた。瞬間的な恐怖がふと彼の裡に過ぎたように思

う。さてそれが何であつたかは彼自身でも知らない。それを捉える間もないほどそれは速かに閃き過ぎたからである。けれどもそれが不思議にも、精神的というよりもむしろ官能的な、動物の抱くであらうような恐怖であつたと思へた。

彼は、その日、しばらく、新しい住家のこの凄まじく哀れな庭の中を木かけを伝うて、歩き廻つて見た。

家の側面にある白樫の下には、蟻が、黒い長い一列になつて進軍しているであつた。彼らのあるものは大きな家宝である食糧を担いでいた。少し大きな形の蟻がそこらにまぐらばれていて、彼らに命令しているように見える。彼らは出会うときには、会釈をするように、あるいは噂をし合うように、あるいは言伝を託しているように両方から立ち停つて頭をつき合せている。これはよくある蟻の転宅であつた。彼は躡まつて、小さい隊商を凝視した。そうしてしばらくの間、彼は彼らから子供らしい楽しみを得させられた。永い年月の間、こういうものを見なかつたことや、もし目に入つたにしても見ようともしなかつたであらうことに、彼は初めて気づいた。そう言えば、幼年の日以来——あのころは、ほかの子供一倍そんなものを楽しみ耽つていたにもかかわらず、その思い出さぬも忘れていた——落ちついで、月を仰いだこともなければ、鳥を見たこともなかつた。そんなことに気附いたことが、彼を妙に悲しく、また喜ばしくした。そういう心を抱きながらそこから立ち上つて歩み出そうとすると、ふと目に入ったのは、その白樫の幹に道化た態をして、牙のような形の大きな前足をそこへ突き立てて囓りついている蟬の脱殻であつた。それは背中のまんなかからぱっくり裂けた、赤くびがびがした小さな鎧であつた。なおその幹をよく見ていると、その脱殻から三四寸ほど上のところに、一疋の蟬がじつとしてゐるのを発見することが出来た。それは人のけはいに驚く風もないのは無理もない。その蟬は今生れたばかりだということは一目に解つた。それはまだごく軟かで体も固まつてはいないのである。この虫はこうして身動きもせずじつとしたまま、

今、静かに空気の神秘にふれていたのであつた。その軟かなまだ完成しない羽は全体は乳色で、言うばかりなく可憐で、痛々しく、小さくちぢかんでいた。ただその緑色の筋ばかりがひどく目立った。それは爽やかな快活なみどり色で、彼の聯想は白く割れた種子を裂き開いて突き出した豆の双葉の芽を、ありありと思ひ浮べさせた。それはただにその色ばかりではなく、羽全体が植物の芽生えに髣髴していた。生れ出すものには、虫と草との相違はありながら、ある共通な、ある姿がその中に啓示されているのを彼は見た。自然そのものには何の法則もないかも知れぬ。けれども少くもそれから、人はそれぞれの法則を、自分の好きなように看取することが出来るのであつた。なお熟視すると、この虫の平たい頭のちようど真中あたりに、ごく微小な、紅玉色でそれよりもっと燦然たる何ものかが、いみじくも鑲められているのであつた。その宝玉的な何ものかは、科学の上では何であるか（単眼というものであろう）彼はそれについて知るべくもなかつた。けれどもその美しさについては、彼自身こそ他の何人より知っていると思つた。その美しさはこの小さなものにも足らぬ虫の誕生を、彼をして神聖なものに感じさせ、礼拝させるためには、なかならず、非常に有力であつた。

彼のあるかないかの知識のなかに、蟬というものは二十年目ぐらいにやつと成虫になるといふようなことをいつかどこかで、多分農学生か誰かから聞き囁つたことがあつたのを思い出した。おお、この小さな虫が、ただ一口に蛙鳴蟬と呼ばれているほど、人間には無意味に見える一生をするために、彼自身の年齢にはとんと近いほどの年を経ようとは！ そうして彼らの命はわずかに数日——二日か三日か一週間であらうとは！ 自然は—たい、何のつもりでこんなものを作り出すのであらう。いやいや、こんなものと言つてただ蟬ばかりではない、人間を。彼自身を？ 神が創造したといわれているこの自然は、おそらくでたらめなものはあるまいか。そうしてでたらめをでたらめと氣附かないで解こうとする時ほど、それが神秘に見える時はな